

## 創作の軌跡

### —エミリー・ディキンソンの詩の異稿研究(2)—

稲田 勝彦

#### I はじめに

本研究は、『ED詩集』<sup>1)</sup>に収録されているエミリー・ディキンソンの詩の異稿を、採用稿、<sup>2)</sup>書簡と共に重要なテキストであると位置づければディキンソン研究に新たな可能性がひらけるのではないだろうかという想定のもとに、ディキンソンの詩の異稿をその形態と内容にわたって考察しようとするものであり、本稿はその第二稿である。<sup>3)</sup>

前稿では、『ED詩集』の成立の過程、異稿の定義と分類、採用稿決定の原則など、主としてディキンソンの異稿に関する外的事実について考察した。その結果、採用稿1,775篇のうち半数弱はまったく異稿を持たない詩(完成稿)であること、従って、本研究の対象となるのは1,775篇の半数強を占める異稿を持つ詩で、これらの詩の異稿は、①代替語句の記入のある採用稿(全異稿の6割強)、②複数の原稿を持つ詩の採用稿以外の原稿(全異稿の約4割。代替語句の記入のあるものも含む)、および③二つの異なる版を持つ採用稿(10篇)に大別することができることがわかった。

本稿では、ディキンソンの詩の異稿のうち、上記①の代替語句の記入のある採用稿を対象に、代替語句の形態および意味を分析して、そこに働いていると思われる言語的・心理的・思想的要因を考察してみたい。

#### II 代替語句の形態

ディキンソンは、書いた詩を清書してポケットに収めたのち、折に触れてはポケットを開いて詩の改作を試みた。こうした改作の試みの跡は代替語句(suggested changes or alternative readings)として『ED詩集』に忠実に収録されていて、代替語句を持つ採用稿は581篇(全異稿の6割強)、代替語句の記入箇所は計1,595箇所を数えることができる。

ディキンソンが単語、語群、行にわたって与えた代替語句の記入の仕方は、①改変すべき語句のすぐ上やすぐ後などの近辺に(スペースが十分ない場合は縦に)記入する、②改変すべき語句や行の頭に×印をつけ、連と連の間のスペースか、原稿の最下部に代替語句や行をまとめて記入する、③時には代替行を記した別の紙片をはさむなどであった。

これら代替語句の形態を分類してみるとおよそ次のようになる。

1. 単語1語に対する代替語

例 11. Stranger] Signor (P-59, S-3)<sup>4)</sup>

これは“A little East of Jordan,”の11行目“Except thou bless me—Stranger!”の最後の語“Stranger”に“Signor”という代替語をあてようとした詩人の意図を示す。このように単語1語に対して代替語を与えている個所は1,226個所で、これは代替語句の記入個所総数の約77%にあたる。ただし、これには、次の例のように、記入された代替語が2語以上から成っていても実質的には1語に対する代替語である場合も含まれる。

例 1. Dim Companion] faint Companion— (P-275, S-1)

例 2. an Accustomed] a familiar (P-149, S-1)

例 2. squander on] spend upon— (P-521, S-1)

例 1. long—long] vast—vast/Brave—Brave— (P-654, S-1)

なお、与えられた代替語は1語の場合が多いが、15語にのぼる例もある。

2. 複数の単語に対する代替語句

例 3. Frankfort Berries] Vats upon the Rhine (P-214, S-1)

これは“I taste a liquor never brewed—”の3行目“Not all the Frankfort Berries”のうち“Frankfort Berries”に“Vats upon the Rhine”という代替語句をあてようとした詩人の意図を示す。

3. 行全体に対する代替行

例 5-6] “Bernardine” Angels, up the hight  
Her trudging feet espied— (P-150)

これは“*She died—this was the way she died.*”の5-6行目、

Her little figure at the gate

The Angels must have spied,

に上のような代替行を与えようとした詩人の意図を示す。なお、行全体に対して代替行を与えている個所は164個所であった。

4. 語句の追加

ある語に代替語を与えるのではなく、新しい語を追加しようとする場合がある。

例 8. Upon her Mat] On her Rush mat (P-303, S-2)

例 7. These—leaned into] These Two—leaned in— (P-962, S-2)

5. 語または行の順序の変更

例 3. Eternity—obtained—in Time] Eternity—in Time obtained— (P-800, S-1)

例 1. The Feet, mechanical, go round—

3 Of Ground, or Air, or Ought—

2 A Wooden way

4 Regardless grown,

A Quartz contentment, like a stone—

(P-341, S-2)

ディキンソンは“After great pain, a formal feeling comes—”の第2連の4行の頭に、上記のように1, 3, 2, 4の数字を記入した。これは、詩人がこれらの行を数字の順序に改変しようとしたことを示す。同様の指示は“*No Bobolink — reverse His Singing*” (P-755) にも見られる。

以上が採用稿に書き込まれた代替語句の形態だが、ディキンソンがどのような語句に代替語句を与えようとしたかを見ても無駄ではあるまい。これを全改変個所の80%弱を占める単語1語の改変個所について調査してみよう。ディキンソンが代替語句を与えようとした単語を品詞別に分類すれば次のようになる：

- 1) 動詞 約33%, 2) 名詞 約29%, 3) 形容詞 約20%, 4) 代名詞 約6%,
- 5) 副詞 約4%, 6) その他, 前置詞, 接続詞, 冠詞, 助動詞 約4~2%。

この数値を、ディキンソンの詩のいくつかを任意に抽出してそれらを構成する単語の品詞別割合と比較してみた結果、ディキンソンが特に動詞と形容詞について改変の必要性を感じていたことがわかった。

### III 代替語句が提起する問題と考察の方法

上記のような形態を持つ代替語句から私たちが判断できることはたったひとつしかない。それはディキンソンが代替語句を与えた個所に何らかの不満を感じてそれを改変しようとしたことだ。彼女が清書までした詩になぜ不満を感じたはわからない。また、彼女が原稿に記入した代替語句を最終的に採用したかどうか、あるいは、複数の代替語句がある場合そのどれを採用したかもわからない。

本研究の第1の目的は、ディキンソンが書き残した代替語句を分析して、彼女がなぜ改変しなければならないと感じたかを帰納的に明らかにすることにある。その具体的作業としては、作品全体の意味も考慮に入れながら代替語句をひとつずつ検討して、ディキンソンがなぜその語句を改変したいと思ったかを推測してみることだ。もちろん、推測にあたっては、改変の動機の仮設らしきものは立ててみた。ディキンソンは、たとえば文法的・語法的に明らかな間違いを発見した時はこれを訂正しようとしただろう、韻律との関連から改訂する必要性を感じたかもしれない、すでに前に幾度も使用した語句を使うことを嫌ったかもしれない、表現が平凡すぎる、あるいは、突飛すぎると思ったかもしれない、内容について考え方が変わったために改

変すべきだと思ったかもしれないなどである。このようにいくつか仮設らしきものは立てたが、ディキンソンが語句を改変しようとした理由と思われるものはあくまでも代替語句を検討して帰納的に得られたものである。代替語句検討の過程で、ある語の使用頻度等が問題になった場合はコンコーダンスを利用した。<sup>5)</sup>また、『エミリー・ディキンソン草稿本』も参照した。<sup>6)</sup>

ディキンソンが原稿に記入した代替語句を最終的に採用したかどうか、あるいは、複数の代替語句がある場合そのどれを採用したかの判断は、『E D 詩集』のような “variorum edition” ではなく、R. W. Franklin などが言う単一の “readers' edition” を作ろうとする時には重要な問題となるが、<sup>7)</sup>本研究では直接の考察対象とはしていない。たとえば次の例で考えてみよう。

例 The Soul selects her own Society—

Then—shuts the Door—

To her divine Majority—

Present no more—

3. To] On                      4. Present] Obtrude                      (P-303, S-1)

ディキンソンは、この詩を読み返した時、“Present” の代わりに“Obtrude”をあてようと思った。3行目の“To”に対する“On”は“Obtrude”という動詞に連動して改変する必要が生じたことはまちがいない。ではなぜ“Present”ではなく“Obtrude”にしたいと思ったかについては、“Obtrude”という語の持つ「人に押しつける」という意味がここではぜひ必要だと思われたからであろうし、また、この語の音の響きもこの連の他の部分によりマッチすると考えたからであろうと思われる。つまり、ディキンソンは、比較的使用頻度の低い珍しい語、従ってより強い衝撃性を持つ語を用いたいという気持から、語句の改変を試みるがあったのだという推測が成り立つ。

しかし、詩的価値判断を持ちこんで“Present”と“Obtrude”のどちらを採用すべきかということになると、詩人の意図の推測はほとんど意味を持たなくなる。1890年の『選詩集』はこの代替語“Obtrude”を採用しているが、フランクリンによれば、この詩は「代替語を不採用とする方が改善される」のである。なぜなら「選んだ友を護る閉じたドアは貫通不可能なのである。人は“Obtrude”することはできず、この詩の第2連の皇帝のように、ただみずからを“Present”するしかない<sup>8)</sup>からだ。

当然のことながら、すべての代替語句の意図が推測できるわけではない。むしろ、詩人が何を目的として代替語句を記入したのかまったく説明のつかない場合の方が多い。しかし、一方では、ディキンソンの代替語句は彼女の創作時の言語的・心理的・思想的変化をいくつかはっきりと示している。

## IV 代替語句に見る詩人の意図

上述のように、『ED詩集』の1,775篇の詩のうち、代替語句が記入されている個所は約1,600個所であった。本章では、そのひとつひとつを詳細に分析し、ディキンソンがどのような動機や意図から語句を改変しようとしたかを推測してみたいと思う。方法としては、代替語句に見る詩人の意図をいくつかに類別し、代表的な例をあげながら、分類項目別に論じることとする。

## 1. 誤字、語法的・文法的誤り等の訂正および正確さを期すための代替語句

ディキンソンが清書稿や未清書稿を読み返した時、明らかな誤字や語法的・文法的な誤りに気づいて、まずこれを訂正したであろうことは想像に難くない。誤字については、“sew,” “sewing” という語の綴りを “sow,” “sowing” としていて最後まで誤字に気がつかなかったと思われる例 (P-617) があったり、“Thermopylae” に対して “Thermopolae” と誤った代替語を与えたりした例 (P-1,554) もあるが、全体としてはそう数多くあるわけではない。

語法的・文法的誤り等については、ディキンソンの英語に学校文法的正誤の基準をあてはめれば、それこそ無数といってよいほど誤りとされるものはある。彼女は名詞の数、動詞の人称や数、代名詞の用法や綴りなどに関する約束事を守らなかったし、造語に近い単語を使った。これらを訂正するための代替語句がほとんど見当たらないところをみると、彼女の語法的・文法的「誤り」は確信犯的なものであったと思われる。

語法的・文法的に誤りとまでは言えないが、より適正な用法に変えたほうがよいと思って代替語句を与えたと思われる例がある。

例 And now We roam in Sovreign Woods—

5. in] the (P-754, S-2)

“roam”には自動詞、他動詞共にあるが、他動詞として用いる方がより適正な用法であると判断したから “in” を削除したのであろう。同様に、次の例は “Witness” という目的語に対する動詞として “made” よりも “bore” の方が適正だと思ったからにちがいない。

例 Our Lord—indeed—made Compound Witness—

13. made] bore (P-553, S-4)

次の例で “fright” という語を動詞から名詞に変えようとしたのも同様の動機からであろう。

例 Of shrinking ways—she did not fright

Though all the Village looked—

9. she did not fright] Forebore her fright (P-804, S-3)

“fright” を “frighten” の意味で用いることは可能だが、ディキンソンはそのまれな用法を結局は改めようとした。

引用の正確さを期すために改訂しようとしたことを示す代替語句もある。

例 The Same—afflicted Thomas—

When Deity assured

‘Twas better—the perceiving not—

Provided it believed—

15] ‘Twas blessed— the seeing not— (P-555, S-4)

ディキンソンは、聖書のトマスに関する記述を最初彼女自身の言葉で書いたが、これを聖書で使われている言葉どおりにする必要がありそうと思って、改めて聖書を開いて、“Jesus said unto him, Thomas, because thou hast seen me, thou hast believed: blessed are they that have not seen, and yet have believed.” (John 20:29) を確認したのち、“better”を“blessed”に、“perceiving”を“seeing”にしたことはまちがいない。

正確を期すという点では、ディキンソンが詩の内容と使用した言葉の間に矛盾を発見して、これを訂正しようとしたことを伺わせる代替語句がある。

例 The Heaven below the Heaven above—

Obscured with ruddier Blue—

Life’s Latitudes leant over— full—

The Judgment perished— too—

14. ruddier] · nearer/comelier (P-756, S-4)

詩人が“ruddier”を別の語に変えなければならないと思ったのは、たとえ“Blue”が単に「空」を意味するものだとしても、「より赤い青色」では矛盾があると思ったからであろう。同様の例をもうひとつあげてみる。

例 The Hopes so juicy ripening—

You almost bathed your Tongue—

When Bliss disclosed a hundred Toes—

And fled with every one—

11. Toes] Wings— (P-507, S-3)

この詩は、あわやというところで小鳥を取り逃がした猫の姿から、希望とは手が届きそうになると逃げてしまうものかという意味を持つが、逃げるのは猫ではなく小鳥なので、ここでは当然“Toes”を“Wings”に変える必要があった。

## 2. 韻律に関わる代替語句

ディキンソンは、韻律、特に脚韻に関してはあまり厳密であったとは言えない。彼女は exact rhyme の他に imperfect rhyme, identical rhyme, vowel rhyme, suspended rhyme,

eye rhyme を自由自在に用いた。彼女は「英語で書く詩人がそれまで一般に受容されるだけ十分巧みに使うことができなかつた」これらの脚韻を自由に使いこなしたのであり、これら自由な韻律は彼女の詩に「さまざまなムード、スピード、サーキットを与える働きをしたのだ」<sup>9)</sup>と肯定的に評価することも可能である。しかし、一方では、完全押韻を良しとするのが一般的であった同時代の詩的趣味に対して、ディキンソンがはたしてそれほど韻律に関して自由であり得たかという疑問もある。ディキンソンの詩の代替語の検討は、この疑問を少し明らかにしてくれるようだ。

脚韻と代替語句との関連を概観したところでは、押韻に関係する個所に代替語句を与えている場合が比較的少ないところから、ディキンソンは押韻に関係する個所は改変を避けていたように思われる。そして、一方では、明らかに脚韻を考慮して代替語を与えようとした例がある。

例 I envy Light—that wakes Him—  
And Bells—that boldly ring  
To tell Him it is Noon, abroad—  
Myself—be Noon to Him—

18. ring] Come (P-498, S-5)

第5連2行目の“ring”と4行目の“Him”は、それ自体で類韻 (assonance) を成すが、ディキンソンは“Come”という意味的にもやや無理な単語をあてようとしている。これは4行目の“Him”と不完全韻を踏ませたいと思ったからにまちがいない。

次の代替語は明らかに完全押韻を意図して改変しようとした面白い例である。

例 So I pull my Stockings off  
Wading in the Water  
For the Disobedience' Sake  
Boy that lived for “Ought to”

4. “Ought to”] “or'ter” (P-1201, S-1)

“Ought to”の綴りを口語発音どおりの“or'ter”にして“Water”と脚韻を踏ませるのは苦肉の策と思えないこともないが、男の子に向かっていつも口癖のように“You ought to...”と言っている親の口調がうまく表われている結果ともなっている。

次の例も脚韻と関連して代替語が示唆された例である。

例 He gave away his Life—  
To Us—Gigantic Sum—  
A trifle—in his own esteem—  
But magnified—by Fame—

3. own esteem] estimate (P-567, S-1)

意味の上ではほとんど変わらないのに“esteem”を“estimate”にしようとしたのは、行末が“Sum—esteem—Fame”となることを詩人が嫌ったからにちがいない。

次の例は同語同韻 (identical rhyme) を避けようとしたための改変である。

例 And though their places somewhat filled—  
As did their Marble names  
With Moss—they never grew so full—  
You chose the newer names—

8. names] times (P-610, S-2)

その他にも韻律との関連から改変を試みようとしたと思われるものがある。

例 The Martyr Poets—did not tell—  
But wrought their Pang in syllable—  
That when their mortal name be numb—  
Their mortal fate—encourage Some—  
The Martyr Painters—never spoke—  
Bequeathing—rather—to their Work—  
That when their conscious fingers cease—  
Some seek in Art—the Art of Peace—

3. name] fame 8. Some] Men— (P-544)

3行目の“name”をあえて“fame”に変えたいと思ったのは、おそらく4行目の“fate”と共に [f] の音を意識してのことだと思われる。8行目の“Some”に対する代替語“Men”について、編者ジョンソンは「どの“Some”かはマークされてはいないが、2番目の代替語“Men”は4行目の最後の語のためであったと思われる<sup>10)</sup>と言ったが、珍しく aabb という形をとっているこの詩の脚韻から判断すると、“Men”は8行目の“Some”の代替語だとも考えられる。

ディキンソンは音を揃えることに意識的であったが、反対に、あからさまな類似音の使用を避けようとすることもあった。

例 The Soul's retaken moments—  
When, Felon led along,  
With shackles on the plumed feet,  
And staples, in the Song,

21. shackles] irons— 22. staples] rivets— (P-512, S-5)



“shackles”と“staples”は局所韻（sectional rhyme）を成し、この連の他の語が持つ [I] の音とも反響してそれなりの技巧を感じさせる語である。しかし、ディキンソンはこれを“irons,”“rivets”というまったく別の語に変えることを考えた。その動機のひとつとして、あからさまな類似音を用いることに抵抗を感じたからということが考えられる。

次の例のように、脚韻を無視するような改変もある。

例 I find my feet have further Goals—

I smile upon the Aims

That felt so ample—Yesterday—

Today's—have vaster claims—

8. claims] form

(P-563, S-2)

“form”は“forms”となるべきところだろうが、“Aims”と“claims”という完全押韻を破壊してまで“form”にしなければならなかったのは、おそらく“vaster”という語に“claims”という語はふさわしくないと思ったのであろう。

### 3. 同一語、類似音の使用を避けるための代替語句

数多くの詩を書いていると、つい同じ語句や同じような表現を用いていることに気がついて、これは改めた方がよいと思うものである。ディキンソンの場合も、まちがいなくそのような動機から改訂を試みたと思われる代替語句がある。

例 She went as quiet as the Dew

From an Accustomed flower.

Not like the Dew, did she return

At the Accustomed hour!

2. an Accustomed] a familiar

(P-149, S-1)

2番目の“Accusutomed”は、1番目の“Accusutomed”があまりにも近くに、しかも似たような位置で使われていることに気がついて、変える必要を感じたのであろう。同じ語句の繰返しは衝撃性を弱めるからだ。

次の例は同一語および類似音を持つ語を避けようとしたと思われるものである。

例 I'm ceded—I've stopped being Their's—

The name They dropped upon my face

With water, in the country church

Is finished using, now,

And They can put it with my Dolls,

My childhood, and the string of spools,

I've finished threading—too—

Baptized, before, without the choice,

But this time, consciously, of Grace—

Unto supremest name—

Called to my Full—The Crescent dropped—

Existence's whole Arc, filled up,

With one small Diadem.

My second Rank—too small the first—

Crowned—Crowing—on my Father's breast—

A half unconscious Queen—

But this time—Adequate—Erect,

With Will to choose, or to reject,

And I choose, just a Crown—

- |                                  |                            |
|----------------------------------|----------------------------|
| 10. name] term                   | 16. half] too unconscious  |
| 12. Arc] Eye/Rim                 | 16] An insufficient Queen— |
| 12. whole Arc] surmise           | 18. Will] power            |
| 13. one small] just one          | 19. Crown] Throne          |
| 15. Crowing] whimpering/dangling |                            |

(P-508)

ジョンソンが言うように、「これはパケットの中の詩で、従って半完成稿だと思われるかもしれないが、ワークシート稿に過ぎない」<sup>11)</sup>のは確かだが、それだけに挿入された代替語の意味は大きい。上記9個の代替語句のうち、同一語あるいは類似音を使いたくないという心理が働いた結果だと思われるものが6個ある。まず10行目の“name”を“term”にしようとしたのは2行目で“name”を用いているから、13行目の“one small”を“just one”に変えようとしたのも14行目の“small”と重複していることに気づいて後者を優先させたため、また、19行目の“Crown”を“Throne”に変えたいと思ったのも同様に15行目ですでに“Crowned”を使っているからであろう。さらに15行目の“Crowing”は、はじめ書いた時にはおそらく同じ行の“Crowned”との視覚的・聴覚的効果を狙っていたはずなのだが、これを“whimpering”または“dangling”に変えようとしたのは、あまりにも明白な修辭的技巧に気おくれを感じたのかもしれない。

16行目の“A half unconscious Queen”を“A too unconscious Queen”に変え、さらに

“An insufficient Queen” に変えようとしたことには（ディキンソンがこの順序で改訂しようとしたことは原稿への代替語句の記入の仕方からわかる）、第2連2行目の“consciously”との関連とは別に、詩の内容と関わりを持つ動機を推測することも可能だ。幼児洗礼で名前を与えられたことは第1の身分ではあるが、第2の完全な身分に比べた場合、たとえ「半ば」でも意識したものであったのでは第1の身分の無自覚性が弱くなることに気がついたのであろう。これは後で述べる「意味強化」のための改変に相当する。

「意味強化」のための改変という点では、“Will”を“power”に、“Crown”を“Throne”に変えようとしたこともその例のひとつである。第2の身分を獲得するには、ただ単に選ばれるいは拒絶する「意志」では不十分で「権力」を持つ必要があるのだ。その権力は単なる「冠」よりも「王座」によって保証されるものであるから、19行目の“Crown”は必然的に“Throne”でなければならない。“Will”も“power”も現代のフェミニストが重要視する概念だが、ディキンソンがこのような形で用いたことは興味深い。

ディキンソンが同一語の使用を嫌ったであろうことは確かだが、彼女は同一語の反復使用を常に避けたわけではない。たとえば、格言的な性格を持つ詩行では、同一語句を意識的に反復使用してその格言的響きを強めている。

例 To wait an Hour—is long—

If Love be just beyond—

To wait Eternity—is short—

If Love reward the end—

4. [If Love] Be at the end—

(P-781)

#### 4. 意味の明確化、表現の平易化を目的とする代替語句

ディキンソンの詩の代替語句を注意深く分析すると、彼女が代替語句を与えたもっとも有力な意図と思われるものが見えてくる。それは語意または文意をより明確に、平易にしたいという詩人の意向である。ディキンソンは、自分の詩を読み返した時、もっとわかりやすくしなければならないと思ったのだ。だとすれば、ディキンソンは、たとえ同時代の人々からいかに奇矯だ、欠点だと言われようと、自分自身の独自性を守って、驚きと言葉のエコノミーを生命とする詩を書き続けたがゆえに今日でも偉大な詩人なのだと信じている現代の読者にとっては、これはやや意外な指摘となるだろう。しかし、彼女の代替語句はこの指摘が一面の事実であることを示している。

語意または文意をより明確に、平易にしたいという詩人の意向を示す代替語句を形態あるいは内容別に分類すると、①言葉不足を補うための語句の追加、②難語の平易化、③隠喩やイメージの平明化、④「奇矯」な語句の平凡化、⑤語句の衝撃性の緩和などに分類することができる。

1) 言葉不足を補うための語句の追加

ディキンソンは、原稿を読み直しているうちに、言葉不足のためそのままでは文意が十分伝わらないのではないかと思うことがあった。そんな時、彼女は言葉を追加したり補充することによってこれを改めようとしたと思われる。

例 Was Paradise—to blame—

If momentarily ajar—

Temerity—drew near—

And sickened—ever afterward

For Somewhat that it saw?

13] [If] Her sweet Door—ajar (P-559, S-3,4)

この詩は、「扉が一瞬開いたために、つい大胆さが高じて、中のものを見てしまったせいでそれから後病気になったとしても、それは天国が悪いのでしょうか？」という意味を持つが、“If momentarily ajar” では、主語が曖昧となり、確かに舌たらずの感を与える。わかりやすさをめざす限り、ディキンソンが “If Her sweet Door—ajar” と補足したくなかったとしても無理はない。

2) 難語の平易化

語意や文意の伝わりにくさを懸念するディキンソンは、難しい単語をよりやさしい語へと変える努力もしたようだ。

例 I only know—no Curricle that rumble there

Bear Me—

7. Curricle] Vehicle (P-647, S-2)

“Curricle” とは2頭立て2輪の屋根なし馬車のことだが、このやや見慣れないと言っている語（使用は全作品の中で1回）はやはり“Vehicle” のようなより親しみやすい語に変えるべきだと詩人は判断したのであろう。同様の例は、“exorbitant” に対する “extravagant / importunate” (P-651, S-1), “unobtrusive” に対する “most familiar” (P-625, S-4), “Jubilee” に対する “Sacrament” (P-593, S-5) などの代替語がある。

もちろん、ディキンソンのことだから、難語を平易化しようとする意図とは逆の意図を示す代替語句もある。

例 Circumference be full—

The long restricted Grave

Assert her Vital Privilege—

The Dust—connect—and live—

7. her Vital Privilege] His Primogeniture (P-515, S-2)

“Vital Privilege” もけっこう難語に属するが，“Primogeniture”という法律用語はさらに特殊である。その他，“Fairy Gig”に対して“Microscopic Gig”(P-500, S-3)という代替語を考えたのも同じ傾向を示す。ディキンソンは変わった地名，人名，科学・法律用語，抽象語を意識的に用いることによってその独自性を示そうとした。その表われがこの例だが，全体としてはむしろ難語を平易化しようとする傾向の方が強い。

### 3) 隠喩やイメージの平明化

わかり易さへの配慮は，難語を平易化しようとすると同じような意味で，隠喩やイメージの見直しへとつながる。

例 Some such Butterfly be seen

On Brazilian Pampas—

Just at noon—no later—Sweet—

Then—the License closes—

Some such Spice—express and pass—

Subject to Your Plucking—

As the Stars—You knew last Night—

Foreigners—This Morning—

3. Sweet] Than

6. Subject] Present

4. License] Vision/Pageant

8. Foreigners] Know not You—

5. Spice] Rose

(P-541)

第1連4行目の“License”を“Vision/Pageant”に，第2連1行目の“Spice”を“Rose”に変えれば，意味はより直截になる。また，第2連の最後の2行の意味は「昨夜知っていた星が，今朝になると，全然見知らぬ存在になっているように」ということだが，この「見知らぬもの」を表すのに“Foreigners”では曖昧だ（あるいは星の擬人化を不自然だ）と思ったのであろう。詩人はこれを“Know not You”というきわめて散文的，説明的なものに変えようとした。

このような代替語句は，時には読者の詩の理解を助ける注のような働きをすることさえある。

例 She staked her Feathers—Gained an Arc—

Debated—Rose again—

This time—beyond the estimate

Of Envy, or of Men—

1. Feathers—Gained an Arc] Wings—and gained a Bush—

3. estimate] inference (P-798, S-1)

この詩は小鳥が木の中の巣を離れ、大空(天国)へと飛び立ってゆくさまを描いたものだが、その謎々の性格のゆえに、一読しただけではその意味をとることが難しいところがある。特に1行目は難解だ。木の中で育ち成鳥になった小鳥が、今、はじめて飛翔を試みようとしているのだから「その羽根を賭けた」のであろう。“Feathers”を“Wings”に変えようとしたのはうなづける。だが、「弧を得た」とはどういうことだろうか。この疑問は“Arc”に対する“Bush”という代替語によって解決される。つまり、小鳥はまず別の木に飛びつくことに成功したのだ。このように、代替語句はまさに「注」の働きをすることもあるが、このような改変が詩の改善となるのか改悪となるのかは意見の分かれるところだ。

4) 「奇矯」な語句の平凡化

隠喩やイメージは、詩においてはもっとも効率的な意味伝達的手段だが、日常会話的なレベルでは逆に意味伝達を妨げる働きをするし、また、あまりにも奇矯だと思わせる原因ともなる。ディキンソンは、奇矯だと受け取られかねない語句をより抵抗の少ない語句に改変しようとした。

例 Noon—is the Hinge of Day—  
Evening—the Tissue Door—  
Morning—the East compelling the sill  
Till all the World is ajar—

2. Tissue] Folding (P-931)

彼女は、“the Tissue Door”(薄い織物のドア)ではあまりに非現実的だと受け取られることを恐れたので、平凡な「折りたたみ戸」にしようとしたのであろう。しかし、これは明らかに改悪である。人がすかして見なければならぬ薄暗がりの中にひろがる夕方の風景の情緒が失われてしまうからだ。

5) 語句の衝撃性の緩和

言葉には、意味的・感覚的に衝撃性のより強いものと比較のおだやかなものがあるものである。言葉の奇矯さを弱め、平明さをめざそうとする上述の傾向は、さらに、衝撃性の強い語句を衝撃性の弱いものに変えようとするにつながる。事実、ディキンソンの詩の代替語句の中にはこうした意図から書かれたと判断できるものが数多くある。たとえば、あえてコンテキスト抜きにしていくつか例をあげれば、“Crooked Hills] Speechless Hills”(P-498), “clumsy] duller (eye)”(P-500), “crashed] broke”(P-514), “squander on] spend upon”(P-521), “never] seldom”(P-531), “wilted] Blackened”(P-951)などがある。このよう

な改変は、いわば意味のトーン・ダウンであるから、詩の意味全体と関連して考えなければならぬことも起こる。

例 I asked no other thing—  
 No other—was denied—  
 I offered Being—for it—  
 The Mighty Merchant sneered—  
  
 Brazil? He twirled a Button—  
 Without a glance my way—  
 “But—Madam—is there nothing else—  
 That We can show—Today?”

4. sneered] smiled (P-621)

ディキンソンは“sneered”という強い響きを持つ語を“smiled”という比較のおだやかな語に変えることを考えた。なぜだろうか。あるいはこの変更によって意味がどう変わり得るのだろうか。フランクリンは、「代替語“smiled”の方がすぐれている。“sneered”は、その擬音語的特性にもかかわらず、強すぎる。それは商人のもったいぶったトーンを壊し、次行の“Brazil”と“Button”の対比を弱めてしまう。その上、このコンテキストでの“smiled”は冷笑を含み、しかももっと微妙な意味で含んでいる」と言って、代替語の方に軍配をあげている。<sup>12)</sup>

偉大なる商人＝神が「冷笑した」のと「微笑んだ」のとではたしかにこの詩の意味は大きく変わってしまう。詩人は自分の命を差し出してブラジル＝天国と交換して欲しいと言ったのに対して、神が「冷笑した」とすれば、それはそんなとるにたりないもので天国を手に入れることができると思っている詩人の身のほど知らずを神が嘲笑ったことになる。これに対して神が「微笑んだ」とすれば、神はそのような無知ではあるけれども純真な詩人に対して少なくとも理解は示してくれたことになる。“sneered”という強い響きを持つ語を“smiled”というおだやかな語に変えることは、神は人間に対して厳しい存在であるという認識からやさしい存在であるという認識へ変化することを意味する。おそらく、ディキンソンがこの詩を書いた時とこれを見直した時とでは、彼女の神に対する信頼の度合いが違っていただろう。“sneered”と書いた時の方が懐疑の気持が強かったのだと思われる。この点については、のちに改めて考えてみたい。

ディキンソンは衝撃性の強い語句を衝撃性の弱いものに変えようとしたが、一方では、逆に衝撃性の弱い語句を衝撃性の強いものに、平易な語句をより難しい言葉に変えようとしたと思わ

れる代替語句も残している。これもコンテキスト抜きでいくつか例をあげれば次のようなものがある：“great] vast” (P-293, S-6), “leads] lures” (P-295, S-2), “guess] prove” (P-501), “dissolve] annul” (P-515, S-3), “falling] crashing” (P-614, S-1)。平易な語句をより難しい言葉に変えようとした例としては, “narrow, probing eyes] analytic eyes” (P-561, S-1), “Just as the case may be] As Deity decree—” (P-608, S-2), “tell it You] signify—/testify—” などがある。

次の詩の代替語句も衝撃性の弱い語を衝撃性のより強いものに変えようとする性格を持つが、さらに詩の全体の意味に作用する代替語句である。

例 A long—long Sleep—A famous—Sleep—

That makes no show for Morn—

By Stretch of Limb— or stir of Lid—

An independent One—

Was ever idleness like This?

Upon a Bank of Stone

To bask the Centuries away—

Nor once look up— for Noon?

1. long—long] vast—vast/Brave—Brave

5. idleness] Arrogance (P-654)

墓の中に眠る死者は、手足を伸ばしたり、まぶたを動かしたりして、復活の時刻の到来を待ち望むそぶりをみせてもよいはずなのに、何世紀も眠り続けている。これは何という怠慢であることかと詩人は言う。“Sleep”の形容詞を“long—long”から“vast—vast”または“Brave—Brave”にすることは、ここで言う衝撃性の強い語句に改変することにほかならないが、“idleness”に対する“Arrogance”という代替語は、ただ単に衝撃性の強化というだけですますことのできない、詩の意味の変化を引き起こしている。つまり、復活に関心を示さないのは死者の「怠慢」であると言うのは死者に対する非難をこめた詩人の判断であるのに対し、これを「怠慢」だと断じる時は、非難の気持はあるにしても、神に対して何という傲慢！という感嘆の気持も加わってくるのだ。

## V まとめ

ディキンソンの詩の代替語句を分析した結果、彼女は次のような意図をもって一度書いた詩の改訂を試みたと思われる。



1. ディキンソンは、誤字、語法的・文法的誤りを訂正しようとした。また、引用等の正確さを期し、用語上の論理的矛盾をただすための改訂も試みた。

2. ディキンソンは、基本的には脚韻に関係する行末の変更は避けたが、脚韻を考慮して改訂を試みることもあった。

3. ディキンソンは、同一作品内で同一語、類似音を使用することを嫌って、これを避けるための改訂を行った。

4. ディキンソンは、詩の語意または文意をより明確に、平易にしたいという強い気持を持っていた。その結果、彼女は①言葉不足を補うために語句を追加した、②難しい語句や表現を比較的平易なものに変えた、③隠喩やイメージを平明なものにした、④奇矯と思われる語句を平凡なものにした、⑤衝撃性の強い語句を比較のおだやかなものに変えた。

以上、ディキンソンの詩の異稿研究のうち、採用稿の代替語句に焦点をあてて、その形態および意味を分析・考察し、その結果を報告したが、紙面に限りがあることもあって、すべての分析・考察が終ったわけではない。次稿では、作品全体の意味に関わる代替語句を中心に論じるつもりである。

#### 注

- 1) Thomas H. Johnson 編, *The Poems of Emily Dickinson*, 3 vols. (The Belknap Press of Harvard University Press, 1955) を『ED詩集』と略記する。
- 2) 採用稿とは、編者がディキンソンの詩の最終稿であろうと判断して『ED詩集』に採用した詩のことである。ジョンソンはディキンソンの詩の異稿を“variants”という言葉で表わしたが、彼の言う“variants”とは詩人が行末や行間に書きこんだ代替語句や行だけを意味した。しかし、本稿で言う異稿とは、行末や行間に書きこまれた代替語句や行のほか、ディキンソンがパケットの詩をコピーして他の人に送ったりしたためにひとつの詩に対して複数の原稿が存在する場合、採用稿とならなかった原稿も意味する。
- 3) 第一稿は、稲田勝彦、「創作の軌跡—エミリー・ディキンソンの詩の異稿研究(1)」:『欧米文化研究』創刊号(1994.9), pp.75-89
- 4) 『ED詩集』の作品番号および連を(P-00, S-00)で表わす。
- 5) S.P. Rosenbaum 編, *A Concordance to the Poems of Emily Dickinson* (Cornell University Press, 1964)
- 6) R.W. Franklin 編, *The Manuscript Books of Emily Dickinson*, 2 vols. (The Belknap Press of Harvard University Press, 1981)

- 7) R.W. Franklin, *The Editing of Emily Dickinson: A Reconsideration* (The University of Wisconsin Press, 1967) p.131
- 8) 同上書, 135頁。
- 9) Thomas H. Johnson, *Emily Dickinson: An Interpretive Biography* (The Belknap Press of Harvard University Press, 1955) p.87.
- 10) 『E D 詩集』, 418頁。
- 11) 『E D 詩集』, 390頁。
- 12) R.W. Franklin, *The Editing of Emily Dickinson: A Reconsideration* (The University of Wisconsin Press, 1967) p.136

The Trace of Composition  
— A Study of Emily Dickinson's Variant Readings (2) —

Katsuhiko INADA

This paper is the second report of our research into Emily Dickinson's variant readings. Focusing on the nearly 1,600 suggested changes printed in *Poems*, we first examined their forms and then considered the intentions which the poet may have had in writing the suggested changes into her fair copies.

By analysing the suggested changes, we can inductively conclude that Dickinson seems to have tried to revise her poems with the following intentions:

1. Dickinson tried to correct misspellings and grammatical errors. She also tried to correct loosely quoted words and logical contradictions.

2. Dickinson made necessary corrections in relation to rhyme, though she avoided touching words at the end of the lines as much as possible.

3. Dickinson tried revision because she did not want the same words or words of the same sound to be used repeatedly in a poem.

4. Dickinson strongly wanted to make the meanings of words or sentences clearer or easier to understand. As a result, ①she tried to add words to fill up the parts which she thought required more words, ②she tried to change difficult words or expressions to easier ones, ③she tried to change images and metaphors to plainer ones, ④she tried to change 'eccentric' words or expressions to more common sensical ones, and ⑤she tried to change strongly shocking words and phrases to less shocking ones.

The other results of our examination into the suggested changes in Dickinson's poems will be reported in the next paper.